

〈研究ノート〉

## 真宗大谷大学建築に関する覚え書

門 脇 健

1913(大正2)年に完成した「真宗大谷大学」の建築の面影を今に伝えるのは尋源館(旧本館)のみである。ここでは、主に尋源館の赤レンガを手掛かりにして、「真宗大谷大学」の建築について論じる。しかし、建築当時の資料が少なく不明な点が多い。現時点で分かったことを「覚え書」として書き留めておく。

### 1. 建築史からみた赤レンガ

烏丸通りには、三条あたりから今出川付近にかけていくつかの煉瓦造りの歴史的建築がみられる。これらを古いほうから並べると次のようになる。(福島明博<sup>1</sup>『近代名建築京都写真館』による、( )内は現在名、次に完成年、設計者/施工者を示す)

#### 同志社大学の建築群

彰栄館	1884(明治17)年、D. C. グリーン/尾瀧菊太郎
礼拝堂	1886(明治19)年、D. C. グリーン/三上吉兵衛
有終館	1887(明治20)年、D. C. グリーン/三上吉兵衛
ハリス理化学館	1890(明治23)年、A. N. ハンセル/請負・小島左兵衛。 監督・谷口八兵衛
神学館 (クラーク記念館)	1893(明治26)年、R. ゼール/小島左兵衛

#### 平安女学院

明治館	1894(明治27)年、A. N. ハンセル/不詳
礼拝堂	1898(明治31)年、J. M. ガーディナー/不詳

#### 京都郵便電信局

(中京郵便局)

1902(明治35)年、吉井茂則、三橋四郎/安藤組

#### 日本銀行京都支店

(京都文化博物館)

1906(明治39)年、辰野金吾、日本銀行建築部、長野宇平治/直営

#### 第一銀行京都支店

(第一勧業銀行京都支店)

1906(明治39)年、辰野葛西建築事務所/清水組

そして、大谷大学尋源館つまり真宗大谷大学本館が、これらの建物のあと1913(大正2)年に完成する。(山口銀行京都支店(現北國銀行京都支店)が赤レンガ風の建物だが、これは1916(大正5)年の鉄筋コンクリートの建物である。)これ以降、赤レンガの建物は烏丸通り以外にもほとんど見られなくなってゆく。

我々は、あの赤レンガの建物を何となく「近代的大学」としての本学のシンボルのように考えている。確かにそれは明治的な近代を象徴しているとは言える。しかし、明治も終わろうとするときに建て始められたその建物は、建築史からみると、どちらかというといふ保守的といふよい建物になるようである。

明治の赤レンガ建築は、まずそれが西洋風であるということで「近代的」であった。また、木造ではなく煉瓦という新しい素材を使ったということでも「近代的」であった。しかし、その様式は、ネオ・ゴシック、ネオ・ルネッサンスという名前が示すように、過去のヨーロッパの様式を典範とする「歴史主義」と呼ばれる流れに属し、既に当時の欧米では保守的になってしまっていた建築様式であった。しかし、明治の日本に最初に入ってきたのがこの「歴史主義」建築であったので、それは明治の日本にとっては、ともかくも近代的であった。その「歴史主義」を日本に確立したのが、日本銀行京都支店、第一銀行京都支店を設計した辰野金吾である。そして彼の設計した赤レンガの東京駅(明治41年着工、明治43年最終案決定、大正3年完成)はその「歴史主義」建築の集大成であろう。東京駅はもとより、京都文化博物館別館、第一勧業銀行京都支店をみると、そこには、「西洋に負けない日本、東洋の中の西洋」つまり「脱亜入欧」という命題を果たしたという自負が感じられる。

しかし、明治も末になると思想界や文学界でそのような「近代化」の見直し・反省がはじまったように、建築界でも「歴史主義」の批判がはじまる。たとえば京都では真宗信徒生命保険本館(現本願時伝道院、1912(明治45)年)などがその例であろう。それは「インド風を基調に、ヴィクトリア朝風の赤煉瓦様式を折衷し、千鳥破風や軒組、蛙股も組み込むなど、日本、インド、ヨーロッパが三位一体した作品である。」<sup>3</sup>

しかし、この異様とも言える建物を設計した伊藤忠太は決して反西洋主義、反「歴史主義」者ではなかった。むしろ、西洋の「歴史主義」を日本において徹底化しようとした人物である。彼はその『法隆寺建築論』(明治26)で法隆寺が現存する世界最古の木造建築であることを明らかにし、そしてその様式がギリ

シャ神殿の様式に通じるものであることを論ずる。つまり、日本にも典範とするにたる様式を発見するのである。このことにより、ひたすら西洋を学習していた当時の建築家達は勇気づけられたという。そして、彼は法隆寺とギリシャ神殿をむすぶ血脈をアジアに求めた。明治35年から3年のあいだ、スケッチ帳と矢立てを腰にロバにゆられながら北京、雲高、西安、雲南をへてビルマ、そしてインドの仏教遺跡を1年かけて探訪し、トルコ、ギリシャ、エジプト、エルサレムを調査するのである。そして帰国後『建築進化の原則より見たる我が邦建築の前途』(明治42)を発表し、維新以来の欧化主義を「日本国民が自殺したもの」と批判し、日本建築を木造から石造に進化させることを主張した。その後、それを実践するかのように西本願時前の真宗信徒生命保険本館、そして昭和になって大作築地本願寺を設計するのである。これは、伊藤が旅の途中、大谷探検隊と出会い、帰国後大谷光瑞の建築顧問になるという偶然からうまれた作品であるが、すでに明治の末に、明治の近代的建築を批判する動きが、本学の身近で起こっていたことは注目に値しよう。もちろん、それがすぐれた建築であったという訳ではない。今見ても異様なそれらの建物は、ちょうど倉田百三の『出家とその弟子』でキリスト教的な「愛」を語る親鸞が異様なのと似ているかも知れない。しかし、そこには時代に敏感に反応していこうとする気概が感じられるのも事実である。

このような動きの中で見ると、大正になって建てられた本学の赤レンガは、そこに何か明確な主張が込められているとは言い難い、きわめてオーソドックスな、あるいはきわめて穏健な学校建築と考えるのが妥当であろう。明治人の激しい気概もなく、また明治から大正へかけての荒々しい批判的精神もおさえられた、きわめて温和な建物と言えよう。

しかし、「大学寮」としての流れから言えば、その建物配置は基本的に高倉学寮の構成を踏襲するものの、高倉学寮では敷地を取り囲むよう寄宿舎が大きな部分を占めていたのにたいし、真宗大谷大学では、寄宿舎は敷地の北のほうにかたまり、本学・講堂・図書館そして運動場・道場が大きな部分を占めるようになっていく。また、本館には事務室・教員室ばかりでなく、「兼修教室・専修教室」がいくつも並んでいるのも、近代的大学に対応したものと言えよう。ただ、これらの建物の配置が当時のほかの大学とどのように違っていたかは、確認できなかった。

## 2. 設計者

まことに奇妙なことだが、この大正2年に完成した現在地の本学の設計者が実のところははっきりしていない。

明治45年1月25日付けの『宗報』では「建築は京大講師清水技師に委嘱して目下設計調査を急ぎ居り、右終わり次第早々に着工の手筈なり。」とあるが、同年6月25日付けの『宗報』では、「同大学建築事務所にありては、松任外次郎氏主任となり、須藤勉、山本八太郎、春山定松、田中善太郎、東野紋之助、岡本年吉等10余名の諸氏、専ら製図中なりしが、既にその設計全般を整頓し、愈建築の機熟したれば、本月13日、同事務所を上御霊西鞍馬口2丁目に移転し、その緒を開きたり。」とあり、そこには「京大講師清水技師」の名は見えない。ところが、同年8月25日付けの宗報では「京都帝国大学講師清水技師の設計に抛り、松任外次郎氏を建築主任として」と、ここで清水技師の名前が復活する。しかし、不思議なことにこの「清水技師」なる人物のフルネームは分からないままである。また、ここに名前見える松任氏以下の人々が京大関係の人々かどうか不明である。この時点では、京大には建築科は存在していないから「清水技師」という人物は土木科関係の人物で、建築の設計というよりも地盤の「調査」にあった人物かもしれない。

さらに、おそらく先に参照した福島氏が依拠していると思われる『新版 日本近代建築総覧』（日本建築学会編 技報堂出版、1980）では、『宗報』が「主任」として紹介する松任氏の名もそして清水技師の名もなく、本館赤レンガの設計に須藤勉、山本八太郎の二人の名前を挙げるのみである。これは、大学全体の設計主任が松任氏で本館に設計には携わったのは須藤・山本の両氏であることを示しているようにとれる。しかし、本館の今に残された十数枚の設計図のうち数枚だけに「松任」という朱印が押されていることから見ると、そのような推測にも無理がある。（ほかの設計図は全くの無署名である。）いずれにせよ、設計者に関しては、今一度調査が必要であろう。なお、施工者は、当時の契約書などが残されていないため、全く不明である。

しかし、その設計者が誰であろうと、その作風は辰野金吾やあるいは伊藤忠太の系統ではないことだけはいえよう。これは、写真だけの印象からしか言えないのだが、金沢の第4高等学校の本館（明治22年）のたたずまいが、本学の本

館にきわめてにているように思われる。これは、文部省のもとで学校建築に携わった山口半六の作品であるが<sup>4</sup>、おそらく「(本山) 教学部長大谷瑩亮師は昨今毎日の如く各学校を巡視して校舎の構造等を研究」(明治44年12月9日『宗報』)した成果であろう。つまり、そのころ学校建築としてオーソドックスとなっていたスタイルを踏襲したと考えられるのである。これは、本学が東京から京都に移った経緯を考えれば、当然といえる。ただ、藤森照信氏は第4高等学校の赤煉瓦を「ゴシックがかったデザイン」と表現しており、「ルネッサンス」(『真宗大谷大学建築一覧』大正2年11月9日)様式といわれる本学の赤レンガとは少し違いがあるのかもしれない。

### 3. 塔の謎

このように設計者とその理念には不明な点が多いのだが、もうひとつ大きな謎は、本学赤レンガに今も慎ましやかに立つ塔の謎である。

明治45年6月18日付けの「京都日出新聞」には「真宗大谷大学本館面之図」が掲載されているが、そこには塔のすがたはみえない。この月の13日『宗報』によればすでに松任主任による建築事務所が鞍馬口に移転している。つまり、本格的な設計が進んでいたと考えられるのであるが、翌年に完成した赤レンガにはいつの間にか塔が乗っているのである。あの東京駅でさえ途中で設計変更があるのだから、建設途中で赤レンガに塔ができたのは不思議ではないが、やはり、ある意味では大学の象徴といえるこの塔がどのような経緯でとりつけられたのかが不明なのは誠に残念である。

第4高等学校の赤煉瓦にも塔はない。おそらくオーソドックスな学校建築としての赤レンガには塔はなかったのであろう。本館の設計図の中には、確かに塔の設計図があるが、それとは別に、彩色された本館正面図と塔の図がある。これは、塔を取り付けるとこんなイメージになりますよという完成予想図のような図に見える。大学側の意向か設計者の発案か分からぬが、建築のどこかの時点で塔の取り付けが発案され、このイメージ図で検討されたのであろう。その図には時計がかかり、あの塔は時計塔として発案されていたことが分かる。実際、大正期あるいは昭和初期と思われる写真には塔に時計が見える。また、その横に鉄骨で組んだ鐘楼も見える。しかし、現在は塔には時計はない。いつ

ごろ、そして何の理由で塔の時計と鐘楼とが取り外されたのかは、現時点では不明である。つまり、いかなる経緯で時計塔がつくられ、いかなる経緯でその時計が消えていったのかが不明なのである。

『金閣寺』（昭和31年）で三島由紀夫は、この塔をつぎのように叙述する。

玄関の屋根の頂きに、青銅の櫓がそそり立っているが、鐘楼にしては鐘が見えず、時計台にしては時計がない。そこでその櫓は、繊細い避雷針に下に、空しい方形の窓で青空を切り抜いているのである。

もちろん、ここには金閣寺に火を放った主人公の心理描写に通じるものがあるだろうが、しかし、大学のシンボルとも言える塔が、いかにして現在の姿となったのか不明なのはどこか「空しい」感じが残る。

以上のように見て来ると、今も本学に残る赤レンガを中心として建てられた「真宗大谷大学」の建物は、なにかの理念をはっきりと主張する建物というよりも、当時の学校建築のきわめてオートドックスなスタイルに則ったものであるといえよう。

しかし、校舎が一新された現在も赤レンガは大学を象徴する建物として博覧館に抱きかかえられようになっている。私たちがこの大正に建てられたこの建物を、本学の象徴としてみるのは、この建物に明治34年東京巢鴨に近代的大学として開校した真宗大学の面影を見いだしているからではなかろうか。実際、東京巢鴨の真宗大学の写真を見ると、木造とレンガ造という違いはあるものの、この赤レンガに非常に似ているのである。赤レンガから塔を取りのぞくと、ほぼ東京の校舎と重なるのである。そしてさらに、このレンガ造という建築様式に真宗大学で発展するはずであった近代的学問のイメージを重ね合わせているのではないだろうか。ある建築家はレンガ造について次のように述べる。

たかだか両手で軽く扱える均一なエレメントを数万数十万と積み上げて壁を築き、ヴォールトを築き、ついには天まで達する塔を築き上げるという構想を抱き、これを一步一步足下の泥の中から始めて、仰ぎ見る高さまで実現する精神、これを仮に「れんが造の精神」と呼ぶとするならば、この「精神」は西欧を創り、またこのような無数の基本的な要素の単純な原則による集積から大きな総合にいたる<sup>6</sup>という「西欧の精神」の形成の一翼を「れんが」が育んだと考えることもできよう。

この「れんが造の精神」とはそのまま本学の学の問題でもあろう。しかし、それは「西洋の精神」である。これを親鸞の精神のうちにどのように活かすか

を、この赤レンガは私たちに問いかけているようである。

#### 4. 建築経緯および財政

本学の東京より京都に移転した経緯は別稿にゆずるが、現在地に本学が建てられたのは、ともかくも移転が決まってからのようである。明治44年11月28日付けの『中外日報』には「東京通信」としてつぎのような記事が見える。

##### 大谷大学新築如何

旧高倉学寮の校舎に新設せる大谷大学は1ヶ年後は必ず校舎を新築すべき事を当局者より公約せられて居り、昨今帝国大学の付近白川村等にて地所の選定買収に取りかかれ居れりとの噂あるが、之に就き消息通は悲観しつつあり、明年中には是非新築すべしと公言し居ることであり又た文部省の規則から云っても腐朽した高倉の仮校舎でやって居る訳には行かないから新築の必要に迫られて居ることは事実であるが、何と云っても金が先立つ世の中だから果たして明年中にできるかは疑問なり、敷地買収にかかったというのは噂に過ぎぬ、事実は其処迄進んで居らぬ、本山では一坪2円か3円の予算であるらしいが、3里も5里も隔てた所ならいざ知らず京都の近くでそんな安価で買い占めることはとても出来ない相談だ、まして京大の付近は地所がたかくなったから20年前の夢を見ているも駄目だ、いよいよ新築することになると如何に安く見積もっても20万円の金を持ってかからねばならぬが、今の財政で20万円を余分に支出する余裕があるかと言う遠忌以後上がり物が少なくて経常費すら差し支えて居る本山が20万円の金が出来るものか、それとも大学を移すとか移さないとか云って異安心だの外道だのと云って居る矢先であるなら信徒を説きつけて校舎の新築費を寄付させると云うような途出来たかも知れないが、大学が高倉に来て2月も3月も経ち異安心問題の熱が冷めた今日、そんな相談を信徒に持ちかけても元来教育と云う事に頭のない信徒等は学校さえ京都に来て仕舞えばよいではないか、今の校舎で充分だと云った調子で受け付けずに極まって居る、又た本山自身でもあのときは気が立って居ったから蛮勇でも何でもやって仕舞えば或いは出来たかも知れないが今日ではその熱が冷めて来て居るから随分六ヶ敷い事であろう、本願寺の財政は決してそんな余裕のあるものぢゃ無い云々。

ここで「遠忌」とあるのはこの明治44年に厳修された親鸞聖人650回遠忌のことである。そのあと、本山財政の逼迫が述べられ20万円の建設資金の調達が困難なことが述べられている。当時の大谷派の経常費は96万円余り（明治45年）であるから、決して小さな額ではない。（この予算は後に45万円まで膨れ上がるが、しかし、現在「情報センター」の建築予算が本山の年間経常費とほぼ同額であ

ることを考えると、それほど大きな額ではないともいえる。あるいは、当時の本山の経常費が今より相対的に大きかったのかも知れない。）

「異安心だの外道だの」と批判された大学を京都にもっていかれた「東京通信」が、その悔しさを晴らすように、「それとも大学を移すとか移さないとか云って異安心だの外道だのと云って居る矢先であるなら信徒を説きつけて校舎の新築費を寄付さすと云うような途出来たかも知れないが、大学が高倉に来て2月も3月も経ち異安心問題の熱が冷めた今日、そんな相談を信徒に持ちかけても元来教育と云う事に頭の無い信徒等は学校さえ京都に来て仕舞えばよいではないか、今の校舎で充分だと云った調子で受け付けずに極まって居る」と予想をしているが、しかし、当時の財閥信徒は「異安心問題の熱がさめた」あとでも教育という問題にそれなりに熱心であったようで、この建築には前向きに取り組んでいたようである。明治45年1月25日付けの『宗報』には

#### 会計常務員会

本月16日午前10時より宮御殿に於て会計常務例会を開催、大阪より岩戸、戸田、名古屋より水野、京都の松居、山田等出席、寺務総副両長を初め上局各重役列席あり、昨年末の会計報告、大谷大学敷地購入の件、今春修行せらるべき大谷別院の法要準備等を諮詢し、午後4時閉会したり。

の記事が見え、そして同年1月18日付けで教学部長大谷瑩亮師が「真宗大谷大学建設委員長」に、おなじく「委員」に会計部長 阿部恵水、監正部長 桑門志道、真宗京都中学長 稲葉昌丸、真宗大谷大学主幹 春日圓城の各氏が命ぜられているから、財閥信徒の支援を受けそれなりに予算のめどが立ったのであろう。

そして、その建設地は「候補地78カ所」（明治44年12月9日『中外日報』）の中から、いったん「妙心寺畔と白川との両地」（同12月28日『中外日報』）が候補地として浮上するが、明治45年1月25日付け『宗報』で「真宗大谷大学建築用地ヲ京都府下愛宕郡上賀茂村字小山（京都府上京区鞍馬口通室町頭）ニ定ム 明治44年12月31日 寺務総長 大谷瑩誠」とあり、結局「40余ヶ所の候補地より選抜し室町頭の長方形の地所1,0500坪を相し、この程既に木標を立てたり。」（明治45年6月18日『宗報』）と現在地に決定している。

また、この地に候補地が決定した要因として名畑崇先生のつぎの記述が参考になる。



東本願寺が大学の用地を北の方に求めているという話が上賀茂村小山に伝わってきたのは、彼岸過ぎの頃であろうか。小山（村）では内藤巳之助、内藤藤治郎、小林政治郎が村の発展をはかるため、大学「誘致」の相談をまとめて村びとに協力を促し、一方で関係者に進んではたらきかけたようである。（中略）2反7畝から21歩まで、大小の田が80枚ほど入りまじり、下半分40余の田が大学の用地としてまとめられたのである。（中略）小林政治郎・内藤巳之助・同藤治郎は田を無償で提供し、持ち主との交渉をすすめた。（1979年12月5日『大谷大学広報「Campus Memorandum」』）

本山がこの地に大学用地をさだめ、また取得できたのは、この内藤巳之助、内藤藤治郎、小林政治郎の努力によるところが多いようである。今で言うと、京都近辺の都市が京都の大学を誘致するそんな感覚であろうか。しかし、それでも自分の土地を「無償で提供して」というのは、きわめて珍しいのではないか。

そして、ともかくもまずその地の地盤整備が開始され明治45年7月、その様子を視察した東本願寺会計常務役員の一行中、大阪の戸田猶七が講堂、岩田惣三郎が貴賓室及び図書閲覧室、京都の松居庄七が正門及び尋源橋を申し出ている。戸田氏は本山に白書院、黒書院、松居氏は大師堂門をこの3年ほど前に寄進したばかりであった。そのころ総工費は45万円になっていた。（明治45年6月17日『京都日出新聞』）

そして、年号が大正にかわった9月起工され、翌年大正2年移転事務が開始され、9月に移転を完了し、10月に竣工、11月9日に落成式を迎えるのである。そのとき、戸田氏は既に亡く、そのご子息と岩田氏が祝辞を述べているが、しかし私たちはこの二人の名をほとんど知らない。たとえば東大なら安田講堂、阪大なら松下講堂というように寄付者の名前を冠した建物があるが、本学では戸田講堂というような呼び方は通称でも存在しないようだ。これは、この二人の寄付者の人柄か、それとも大学全体を宗教施設として考えており、本山の建物に個人名を残さないごとくに考えられていたのだろうか。

その後、本学は近代的大学の様相を整えていくのであるが、その一方、その大学の姿とその建物を寄進した人々との思いは少しずつずれていった。あの昭和の初めの金子大栄の異安心問題は、本山の会計常務委員の財閥信徒の異議申し立てに端を発するのである。金子大栄校訂の『歎異抄』が岩波文庫となったことに象徴されるように、「近代的」とは当時の先鋭的なインテリに支持される方向であった。しかし、信徒たちの望んだのはその建物に象徴されるように穏健な、保守的な方向であった。学と真宗の現場をいかに分離しそして統合する

かという問題がここにある。この問題は昭和期になるとさらに微妙な蔭を投げ掛けるが、それはまた稿をあらためて論じられるべきだろう。

- 1、日本機関誌出版センター、1996年。
- 2、藤森照信『東京駅』、集文社、1988年。
- 3、福島68ページ
- 4、これらは藤森照信『日本の近代建築上・下』（岩波書店）及び松村貞治郎『日本近代建築の歴史』（日本放送出版協会、1977年）を参照した。
- 5、木場明志氏のご教示による。
- 6、木村昌夫「れんがよる建物づくり」INAX ギャラリー「れんがと建築」所収 INAX、1994年